

〔巻頭言〕

ロンドンの研修で学んだこと

育成期看護学講座教授 服部 律子

本学の国際交流委員として英国のNHS (National Health Service) の看護職の方々と交流させていただいている。本学は派遣事業として過去3回英国訪問を行っており、私も文科省の海外先進教育研究実践支援プログラムによって、看護の生涯学習をテーマとした研修を体験している。英国の派遣事業に参加した教員は8名であり、平成14年1月には、英国の看護基礎教育と大学が行っている卒後の教育システムについて情報収集を行い、平成17年3月、18年9月にはWBL (Work Based Learning) という日常の仕事の場で学ぶことが、キャリアアップとして認定された資格取得につながる生涯学習の取り組みについて、研修を実施した。

本学は県立の看護大学として卒業生をはじめとする県内の看護職の生涯学習の拠点として看護研究センターをもち、研究科の特徴としても県内の看護職の生涯学習の場として貢献している。日頃は、県内の看護の現状に往々にして注意がむくのであるが、視点を変えて海外の看護実践に注目してみると、改めて私たちが取り組んでいることの意義も確認でき、先進的な取り組みとして学ぶことも多いのである。ロンドンで国として組織的に取り組んでいるWBLの活動を学び、特に英国が誇りとしているプライマリーケアの現場での看護職の自律した働きに実際触れるのは、私たちには刺激的であり、日ごろの教育や看護について、さまざまな思いが広がるのである。それは私たちの仕事への自負であったり、教育へのアイデアであったり、国際的な学術活動へのデビューであったり、大胆にも看護施策への提言であったり、とにかく夢をもつことができる。高揚した気分と極度の疲労感とともに派遣事業を終えるのであるが、さて、教員へその思いを届けようとしてもなかなか発表の場では伝えることが難しく、どうすればこの経験を真に活かすことができるか、思案しているところである。

英国の医療制度はNHSにより運営されており、その

財源は国民の税金である。英国の医療福祉制度は、誰でも無料で必要なヘルスケアを受けられる、かつて「ゆりかごから墓場まで」というスローガンで先進国の福祉国家のモデルとされた。しかし、経済の低迷により、医療制度は荒廃し、私たちが訪問した当時から、ずっとNHS改革は国策の重要課題である。NHSの課題は山積みであるが、改革の成果は確実に医療の現場を変えていっている。看護についても、看護の専門性が発揮できる制度がわが国に比べて整っており、医師不足の穴埋めではなく看護ケアの担い手として活躍している。

生涯学習については、深刻な看護師不足への対応もあるが、現在働いている看護師の質をあげることで、医療の様々な問題に対応し専門職としての士気も高めていくことができるという基本的な考え方がある。看護師を養成するにも経費がかかり新人が一人前になるまでも年数がかかるので、卒後の教育制度を充実させるほうが現在の看護の質を高めることができるというのは、効率的で有効なことであると思う。この方針を国策として多額の予算をかけて取り組んでいる実績は、わが国も参考にできるのではないだろうか？

英国に行って感じるのは、英国ではLifelong learningの考え方が重視されており、学校教育の基盤に、自立して学べる人間作りがあるということである。今看護のみならず、専門性の育成とともに学士課程の教育の意味が問い直されている。生涯学習の基盤となる学士課程の教育についても英国の研修から考えさせられるのである。